

Title	No. 39 : 千葉病院矯正歯科における平成24年 (2012年)初診患者の動向について
Author(s)	加瀬, 利美; 伊藤, 真奈美; 村瀬, 千明; 東郷, 聡司; 野村, 真弓; 茂木, 悦子; 末石, 研二
Journal	歯科学報, 113(2): 216-216
URL	http://hdl.handle.net/10130/3028
Right	

No.38：本学第3学年における保存修復学教育について - 第120, 121期生の実習後アンケート結果から -

春山亜貴子¹⁾, 杉山利子¹⁾, 野呂明夫¹⁾, 近藤祥弘¹⁾, 杉山節子¹⁾, 細川壮平²⁾, 浅見政子¹⁾, 杉戸博記³⁾, 亀山敦史¹⁾, 高橋俊之¹⁾ (東歯大・千病・総合診)¹⁾ (東歯大・口健・総歯)²⁾ (東歯大・口健・保存)³⁾

目的：これまで、我々は歯の硬組織疾患の治療に必要な技能を修得できることを主な目標に、Greene V. Black が推奨した理論的な窩洞形成法とその修復法の実践を中心に保存修復学臨床基礎実習を行ってきた。しかしながらカリオロジーの発展や接着性・審美性に優れた修復材料の開発に伴い、現在の保存修復学の基本概念は Minimal Intervention (MI) にシフトしており、すでに歯科医師国家試験の出題傾向もこれに合わせて大きく変化した。このような背景から、我々は平成24年度第3学年(121期生)への臨床基礎実習における教育内容を大きく改変した。そこで、平成23年度および24年度の実習終了時に実施した学生アンケートの結果をもとに、その教育効果を検討したので報告する。

方法：23年度および24年度の保存修復学臨床基礎実習最終日に学生全員(120期生:134人, 121期生138人)を対象として、実習内容の理解度などに関する無記名アンケートを行った。

成績および考察：アンケートの回収率は120期生94.03%(126人), 121期生100%であった。

窩洞に関して、「講義だけでは分かりにくかったが実習を通して理解できた」との回答が23年度, 24

年度ともに多かった。24年度では修復物の種類による窩洞形態の違いとその理論的背景が視覚的に比較できるよう、1級複雑メタルインレー修復窩洞, 2級複雑メタルインレー修復窩洞, 2級複雑アマルガム修復窩洞の3種類を同一歯(16番歯エポキシ模型)に形成させた。これらの配慮により視覚的な理解が深まったものと推測された。

一方、隔壁法については「実習を行っても講義内容を理解しにくかった」との回答が24年度で高かった。これは、23年度まではコンポジットレジン修復の実習を前歯(3級, 5級)でのみ行っていたのに対し、24年度では1級から5級のすべてを実施したこと、臼歯部修復(1級, 2級)ではラバーダム防湿下での修復としたため、修復術式が非常に複雑になったことが考えられた。

24年度では講義・実習連動型教育を実践した。この方法は、従来の講義実習分離型教育に比べ、講義で学習した内容を基礎実習ですぐに実践するため、知識を効率よく習得できる。ただし、知識の理論・背景などを理解したうえで実習に臨めるとはかぎらない。したがって、予習レポートによる事前の自己学習が必要と思われた。

No.39：千葉病院矯正歯科における平成24年(2012年)初診患者の動向について

加瀬利美¹⁾, 伊藤真奈美¹⁾, 村瀬千明²⁾, 東郷聡司²⁾, 野村真弓²⁾, 茂木悦子²⁾, 末石研二²⁾ (東歯大・千病・歯衛)¹⁾ (東歯大・矯正)²⁾

目的：本学は9月に水道橋移転を控えているが、千葉病院の継続は決定している。そこでこの過渡期に患者動向を調査し、今後の患者対応の一助とすることを目的として本調査を行った。

方法：平成24年1年間の初診患者を対象とし、調査票等を中心として、初診患者数、その後の精密検査受診者数、治療決定者数、年齢及び性別来院患者状況、月別、曜日別来院患者、不正咬合別患者などについて調査した。

結果：平成24年に千葉病院矯正歯科に来院した初診患者は961人、男性308人35%、女性579人65%であった。そのうち平成25年4月8日現在、精密検査受診患者は510人で初診患者の53.0%、治療決定者は465人48.3%であった。決定率の男女差はなかった。年齢別では、10~19歳が352人36.6%でトップ、0~9歳342人35.6%、20~29歳148人15.4%であり、20~29歳が精密検査受診率60.1%と高かった。以下30~49歳101名10.5%、50歳以上が18人1.9%であった。月別初診患者は3月、8月が学校の長期休暇と関連して多くみられた。曜日別初診患者は月曜日が最も多く、木曜日が最も少なく、土曜日の初診患者が多かった。

精密検査受診者510名の治療区分として、混合歯列期対応の「早期治療」が193名38.1%、永久歯列

対応の「本格治療」が158名31.0%、健康保険対象の外科矯正99名19.4%、口蓋裂等先天異常50名9.8%、MTM9名1.7%であった。不正咬合別では、上顎前突175名34.3%、下顎前突(反対咬合)156名30.5%、叢生153名30%、交叉咬合44名8.6%、開咬39名7.6%、過蓋咬合33名6.5%、空隙歯列7名3.5%、切端咬合1名0.2%であった。

考察：これらの結果を昭和62年(1987年)永井ら、1990年、2000年、2010年井上・東郷らの調査と比較すると、1年間の初診患者の総数は緩やかな増加傾向はあるが800~1,000名の間で推移していた。治療の決定率は上昇しているものの50%前後であり、この点工夫が必要と考える。変化しているものとして、男性患者の増加がみられ、矯正治療が一般的に浸透していると考えられる。また、来院最多数年代が10代以下から10代へとシフトし、4~50代が患者の最高齢者だった62年と比較すると高齢患者の増加が顕著であった。

結論：千葉病院矯正歯科の平成24年初診患者の動向を調査した結果、少子高齢化が反映して患者年齢層が高齢へシフトし、また、歯科矯正治療が一般的に浸透してきていることが男性患者の増加に繋がっているものと考えられた。